

野殿・童仙房地域における生活の中の伝統行事のフィールドワーク
— 神社祭祀とその継承を中心として—

A Fieldwork for Classic Events in Nodono-Dosenbo Area

Focusing on Shrines' Annual Events and Their Succession

研究代表者 辻 喜代司 (D1)

教員 前平 泰志

研究分担者 崔 善今 (D1) 岡田 薪子 (M2) 鏝 純香 (M1)

研究協力者 山口 記世 (B4)

〔研究目的〕

野殿・童仙房地域は、京都府南端に位置する南山城村において村域北部の童仙房高原上に隣接する二つの農業集落である。2006 年に締結された同地域と本学教育学研究科との相互協定にもとづき「野殿童仙房生涯学習推進委員会」が発足し、地域住民と学生・院生との交流が、教育実践コラボレーション・センターおよび生涯教育学講座を中心として活発に行われている。

生涯教育学講座の実践課題と結びついたこの相互交流の進展は、必然的に院生の研究課題を提起し、2007 年から 2 年間にわたり、院生主体の共同研究として「野殿・童仙房地域における協働的な『学びの空間』をめぐるフィールドワーク」が取り組まれた。これは、住民からの聞き取りによって、地域の歴史や習俗、地場産業等に関する理解を深めつつ、地域で暮らす人々の生活意識を分析しようとしたものである。この中で、明治の初頭に開拓村として成立した童仙房区と、近世以来の農業集落の伝統を受け継ぐ野殿区の地域特性が明らかにされてきた。

本研究はその成果と課題を踏まえて、地域の暮らしと直接結びついた調査研究のありかたを模索し、地域の伝統行事への参加にもとづくフィールドワークを研究課題とした。即ち、本研究においては、野殿・童仙房地域における伝統行事と住民生活との関係性を、神社祭祀とその継承が地域の暮らしとどのように結びついて行われているのかに焦点を当て、地域住民からの聞き取りを中心としたフィールドワークを通して明らかにすることを目的とした。

〔研究経過〕

コロキアム研究の共同基盤となる資料講読やディスカッションを経て、フィールドワークにむすびつくように配慮した。地域研究に関わる文献を幅広く講読する導入期を経て、先行研究の検討期間を設け、構成メンバーによるサブテーマを設定した。また、対象地域での聞き取りを中心としたフィールドワークのための方法論についての共通理解を深めた。この間、対象地域の区役員のみなさんと研究チームの院生との顔合わせを兼ねた交流会を開催し、地域研究の可能性と課題についての意見交換も行った。

童仙房区でのフィールドワークでは、教育実践コラボレーション・センターが主催する交流イベントにも積極的に関わりながら、コロキアムの研究活動として、区の夏祭りや童仙房大神宮社の秋大祭に参加し、生活の中での祭りの様相を探った。一方、野殿区の氏神を祀る六所神社関係では、「餅放り」行事と秋大祭を見学し、宮座による祭祀運営の参与観察を行った。真言宗寺院の福常寺関係では、「遍照講」と「虫送り」行事に体験参加した。後者では農耕儀礼が区の行事として継承されている様子取材している。

〔研究成果〕

教育科学の知と地域で受け継がれてきた知との交流によって生じる、学社融合的な知の醸成をめざしながら、生涯教育学研究としてのオリジナリティーを追求した。

両地域の氏神を祀る六所神社と童仙房大神宮社に関わる研究では、その年中行事のうち、祭祀組織の活動が集約的に表れる秋大祭に取材し、参与観察記録に考察を加えた。その報告ではまず、六所神社の秋大祭が、御供（ごく）当番を初めとする氏子持ち回りの当番制で維持されている点に着目し、当番の目線に立って野殿祭祀の特色を明らかにしようと試みた。その中で、米やモチを核とする独自の食文化の継承が観察されるとともに、祭祀の継承の困難性が、「座員」の生活の変化と不可分に結びついている点が浮かび上がってきた。一方、童仙房大神宮社の秋大祭の報告では、神輿保存会が中心になって催行している神輿の区内巡行を「担ぎ手」の視点から捉え、その意義と継承への展望を明らかにしている。

寺院に関わる祭祀については、野殿区の福常寺の場合を取り上げた。同寺は地区外からの兼務住職の職掌にあるため、檀家によって行われる「寺世話」の果たす役割が大きく、年中行事には、住職によるものと区がその運営を担っているものとが存在することがわかった。その報告では、住職と住民からの聞き取りによって、寺の祭祀と住民生活との関わりを明らかにしつつ、それらの継承についても論じた。

本報告ではさらに、童仙房における民俗伝承の存在に触れ、日常生活の中の信仰と伝承の有りようを探っている。本研究における聞き取り調査では、こうした民俗伝承が消失過程にあることを指摘する声があり、それらを再収集する意味を問い直す作業も含めてフィールドワークに取り組んだ。

〔文責：辻 喜代司〕